

学生運動の軌跡「歴史」に



日本大学の大学運営に学生が抗議した「日大闘争」の最初のデモの写真。1968年5月撮影

60年代末 全共闘・反戦…

千葉の歴博で企画展



日本大学の学生による「日大全共闘」が1960年代末に使ったヘルメット

集会やデモへの参加を呼びかけるビラや旗、身につけていた鉢巻や腕章、そして当時の写真……。1960年代末の学生による全共闘運動やベトナム戦争反対運動を題材にした企画展が国立歴史民俗博物館（歴博、千葉県佐倉市）で開かれている。社会運動の軌跡を「歴史」ととらえた国立施設での企画展は、例がないという。

元活動家が寄贈

タイトルは「『1968年』―無数の問いの噴出の時代―」。東大全共闘議長として東大闘争を率いた山本義隆さん(75)らから段ボール10箱分(約6千点)、日大闘争の元活動家らから40箱分(約1万4千点)が2013年に寄贈されたのがきっかけだった。

「東京の学生運動に限ら



「ベトナムに平和を！市民連合」(ベ平連)の地方組織「ベ平連こうべ」の旗。いざれも国立歴史民俗博物館提供

ず、各地で起きた60年代末の社会運動を『面』として広くとらえられないか」。

日本近現代史を研究する荒川章二・歴博研究部教授(65)らはそう考え、「ベトナムに平和を！市民連合」(ベ平連)などによる反戦運動や水俣病患者の運動、千葉・三里塚の成田空港反対運動などにも広げて資料を集めた。こうした運動の資料を収集している立教大

1968年とは

第2次世界大戦後に生まれた「ベビーブーマー」世代、日本でいう「団塊の世代」が成人を迎え、若者による抗議行動が多発した。東西冷戦下、米国が軍事介入したベトナム戦争への反対運動が欧米や日本などで盛り上がった。

米国ではアフリカ系市民が権利向上を求める公民権運動を展開。フランスでの学生と労働者による反体制運動「五月革命」、旧チェコスロバキアで「プラハの春」と呼ばれた民主化運動などが起きた。

や法政大、埼玉大などからも提供を受け、計約500点を展示している。

「もの申す」時代

「戦後の民主教育で個性や議論の土壌が培われた世代が成長し、個人として『もの申す』動きが層となつて出た時代だった」と荒川さんはみる。

21世紀に入り、歴史研究の対象にもなってきた。自身が生まれる前の60、70年代の沖縄の運動について研究している大野光明・滋賀県立大准教授(38)は「今は社会運動が過激だとして日常から切斷され、危険視されることも多いのに対し、50年前はさまざまな運動の問題意識が共鳴し、つながっていたと感ずる」と話す。

運動を担った世代が自分たちの軌跡を振り返る動きもある。山本さんらが集めた日本のベトナム反戦運動資料の展示会が、ベトナム

・ホーチミン市の戦争証跡博物館で開かれているのもその一例だ。

一部が先鋭化も

ただ、60年代に全国に広がった学生らの運動は、70年代には急速に衰退。一部が先鋭化し、連合赤軍あさま山荘事件やよど号ハイジャック、連続企業爆破といった事件を起こすなど、負の側面もある。

荒川さんは「日本の社会運動は長らく党派や組織が基盤となり、現代からみると後退期の過激化したイメージが強い。だが60年代末の運動は党派ではなく個人の発する問いを重視していた点に特徴がある。個人原理による運動は最近のデモにもみられるが、当時の運動の多種、多様さやパワーは際だっていた。今回はそこに焦点を当てたい」と話す。12月10日まで。(編集委員・北野隆一)